

たまるみち 田丸道遺跡現地説明会資料（第2回）

～古墳時代の木組みの堰^{せき}～

2011年1月23日

三重県埋蔵文化財センター

つかだこふんぐん たまるみちいせき
塚田古墳群・田丸道遺跡（度会郡玉城町妙法寺・中楽）は、昨年12月23日に現地説明会を開催しましたが、その後北側へと調査を進めたところ、新たな発見がありました。

今回調査した場所は、^{ほじょうせいび}圃場整備前には「善兵衛川（ぜんべえがわ）」が流れていたところ（第1回現地説明会資料参照）。調査した場所からは、圃場整備前の川の跡が3条見つかりました。いずれも善兵衛川の昔の川跡と考えられます。このうち、最も北にある川跡（川跡3）は、幅40m、深さ2.5mもあるとても大きなものです。川跡3の中程から、堰（せき）の一種が見つかりました。

この堰は、川底に木の杭を打ち込んで造られています。このような木杭を伴ったものを「シガラミ」とも呼んでいます。これは、堰（シガラミ）を川の中程に設けることで、水の流れを変える工夫をするものです（模式図参照）。流

れを変えた水は、川に付けられた別の溝を通り、おそらく周辺につくられていた田んぼへと導かれたと考えられます。

川跡3の堰付近からは、古墳時代後期（今から約1,500年前）頃の土器のほか、たくさん木製品が見つかりました。木製品は板材が中心です。他には、川に水が流れていた頃の植物（ドングリや桃の種など）がたくさん見つかっています。川跡3が完全に埋まる時期は、見つかった土器から平安時代後期（今から約900年前）と考えられます。

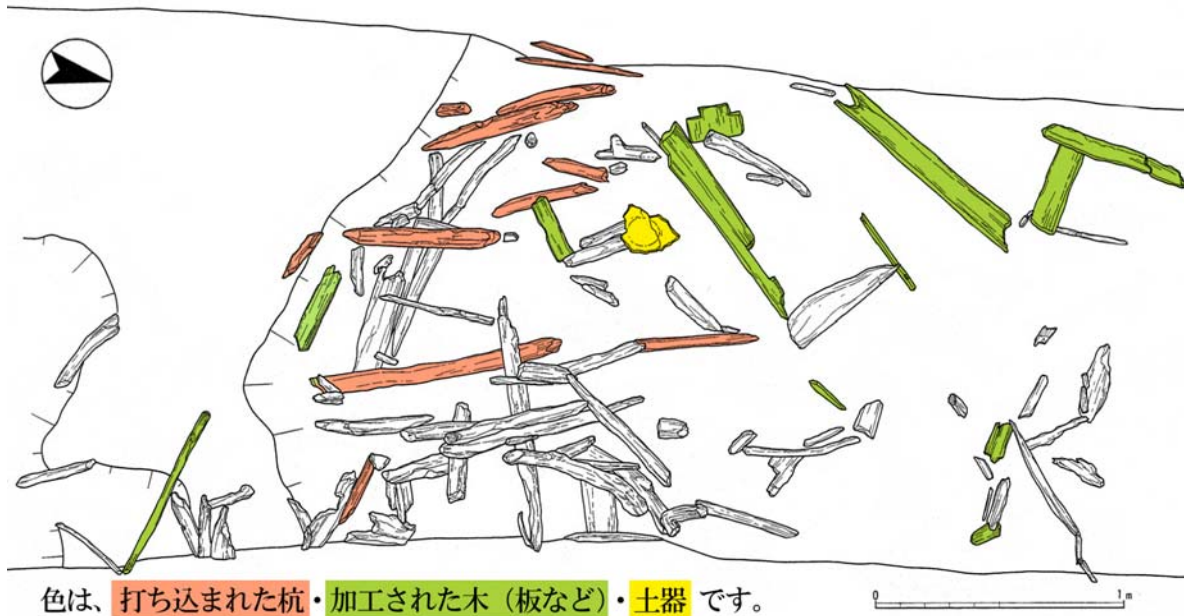


田丸道遺跡全景（北から）

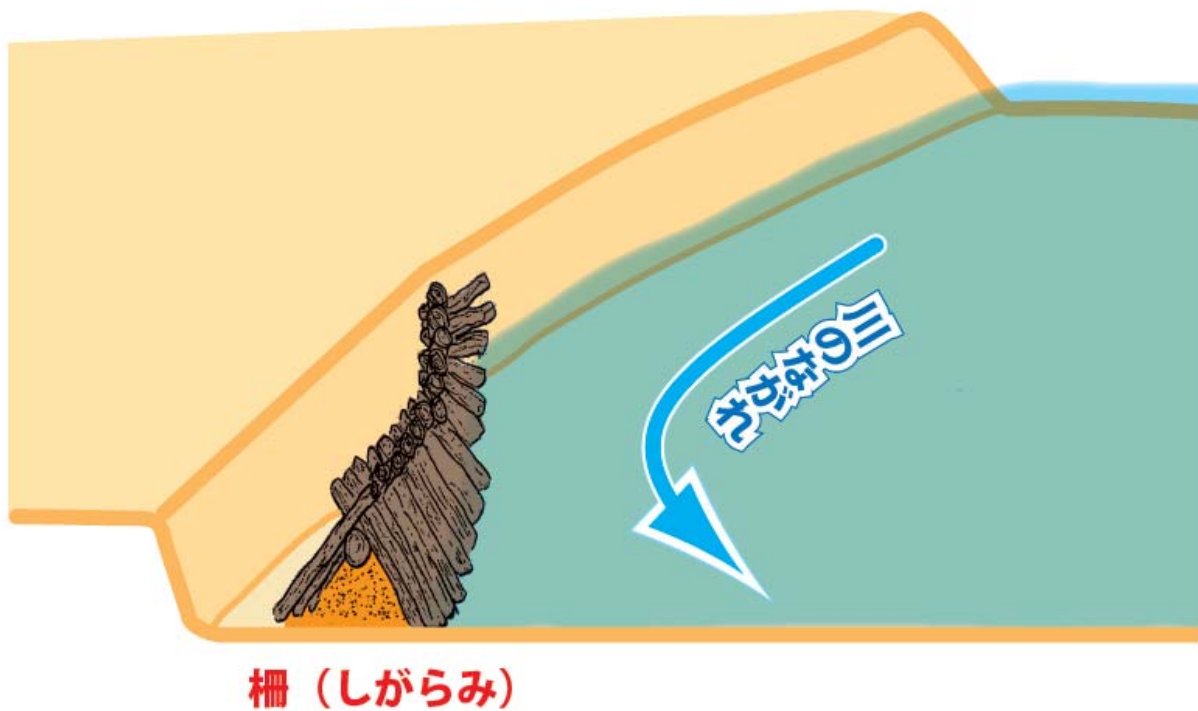


川跡3で見つかった堰

これまでの調査から、田丸道遺跡では古墳（塚田古墳群）が造られたすぐ近くに堤のある川があり、周辺には水田が広がっていた、ということが分かってきました。川跡3は、その規模から当時の外城田川（ときだがわ）本流の可能性が高いと考えられます。当時の景観は、今とはかなり違っていたようです。



田丸道遺跡 川跡3の堰



堰（しがらみ）の模式図

川のなかに造ることで、水の流れを変えます。